

現代親分乾分物語

著策達

特 241
784

Oyabun
Kobun
Monogatari

10 巻



* 0033379000 *

2

0033379-000

特 241-784

現代親分乾分物語

藤原達策・著

東亜書房

昭和 11

AGA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するも

親分乾分物語

著策達

特 241

784

Oyabun
Kobun
Monogatari

10 卷

34

//

特241
784



藤原達策著

現代親分乾分物語

東京 東亞書房



目次

政界の巻

華胄界の青年親分近衛公……………(七)
黒幕親分伊澤多喜男……………(九)
生ける屍鈴木喜三郎親分……………(一一)
惑星親分久原房之助……………(一三)
金で買った親分町田忠治……………(一五)
世に叛いた親分安達謙藏と其乾分……………(一六)

官界の巻

時代と共に變る親分乾分……………(一八)
新官僚の親分後藤文夫と其乾分……………(一九)

大藏省の黒田英雄親分とその乾分……………(三一)

財界の卷

私的内在的な親分乾分關係……………(三三)
「高等世話人」郷誠之助とその一黨……………(三五)
引退しても大親分池田成彬……………(三八)
近代型親分藤原銀次郎とその乾分……………(三〇)
その他大親分と乾分……………(三一)

文壇の卷

「文藝春秋社」に據る菊池寛と其一派……………(三一)
「新潮社」による中村武羅夫とその乾分……………(三四)
三田の親分水瀧太郎とその乾分……………(三五)
その他の群小親分……………(三六)

探偵畑の親分森下雨下とその乾分……………(三七)

畫壇の卷

舊態依然親分割據の畫壇……………(三九)
西の親分竹内栖鳳とその一黨……………(四〇)
東の親分横山大觀とその一黨……………(四二)
群小團體の總帥とその一黨……………(四三)

樂壇の卷

日本樂壇の元老山田耕筰と其乾分……………(四四)
貴族出の親分とその乾分……………(四六)
掛聲ばかりの大御所伊庭孝……………(四八)
音樂協會のボス堀内敬三……………(五〇)
パトロン親分大倉喜七郎……………(五一)

序

明治維新以來、僅々五、六十年間に、躍進又躍進、近代國家としての發展を完成した我が國は、最高の文化國としての様相を示すに至つた。

國民大衆の生活様式は變化し、觀念形體も著しい推移を示した。然し、さうした變化、推移をよそに、依然として、國民大衆の思惟様式には變化し切れないものがあつた。それは、仁義の精神として表はれ、各社界に於ける親分、子分の關係に於いて、表はれてゐる。本書に於いては、政界、官界、財界、文壇、畫壇、樂壇の各方面に亘つて、さうした親分子分の關係を解剖しようと思ふ。

藤原達策識

政界の卷

華胄界の青年親分近衛公

貴族院で親分肌の殿様と言へば、故小笠原長幹伯と並稱される青木信光子に、第一指を屈しなればならなかつた。有り餘る金あまはなくとも世話好きで、よく乾分の面倒を見、温厚篤實、柔和な風貌は、そのニツク・ネイム「徳川家康」に恥ぢざるものだつた。しかし世は移る。

この殿様親分、相棒の小笠原伯に長逝されて以來、昔日せきじつの面影おもかげはなく、次第に親分の箔が剥れて來た。所詮青木子は、歴史的使命を果した古い型の、過去の親分に過ぎなくなつた。

こゝに青木子あをきに代つて、近代的親分として、俄然がぜん、貴族院に重きをなして來たのが、誰あら

う、本年とつて四十六歳の青年貴族近衛文麿公である。

彼は公爵であり、父に近衛篤磨といふ明治の逸才をもち、背景に西園寺元老といふ政界の總元締をもつてゐる。生れながらにして、素晴らしい好條件に恵れた特權貴族で、ユニークな魅力をもつてゐる。

「西園寺の祕藏つ子」と稱され、二・二六事件直後、岡田内閣總辭職にあつては、組閣の大命を拜し、西園寺元老によつて、總理大臣の資格あり、とレッテルを貼られた、輝かしい將來をもつ政治家である。

現に貴族院議長であり、特別議會終了後、馬場蔵相から無任所大臣の交渉をうけたとも噂され、將來政局の推移に對しては、重大な發言權をもつ一人である。

彼は五攝家の筆頭といふ家柄に生れながら、非官僚的な氣概をもつてゐる。これが又、彼の偉大な魅力である。

これだけで彼の近世親分たるの資格は、充分である。

しかも、彼は京都大學切つての秀才で、火曜會を牛耳る手際など、頗る鮮かなものだと囁かれてゐる。

彼の傘下に馳せ參する者には、細川護立侯、木戸幸一侯、廣幡忠隆侯、佐々木行忠侯等々、少壯有爲な人材が多い。

ことに、木戸侯は、明治の元勳木戸孝充の子であり、牧野伸顯を背景にもつ、京都大學出の秀才である。

近衛公は、これ等取り巻き貴族を擁して、貴族院改革の爆彈を投じたのである。彼の得意思ふべしと言ひたい。

彼こそ、上流華胄第一の大親分ではなくて、何であらう。

黒幕親分伊澤多喜男

政變毎に、必ず話題に上り、「黒幕」と稱される男に伊澤多喜男がある。

西巢鴨の寓居に悠々白適の生活を樂しみ、「俺は天下の浮浪人さ。」と嘯いてゐるが、彼こそ官僚畑の總帥、大親分なのである。

彼は明治二年、長野縣下伊那郡高遠に生れ、同二十八年東大法科卒業、内務省に入り地方廻

りをなし、大正十三年大隈内閣の警視總監に任ぜられ、翌年時の内相大浦兼武に殉じて辭職、爾來貴族院に於ける民政黨の前身たる憲政會の謀將と目され、大正十三年臺灣總督、同十五年東京市長に歴任し、濱口内閣の際には、濱口雄幸の同期生として、その帷幄に參じた。

以後、今日に至るまで、六度に亘り、大臣就任の交渉を受けたけれども、彼はその都度、

「俺は縁の下の力持でいゝ。いゝことなら何んでも盡力する。」

と、拒絶してゐる。

彼は政治家に珍らしい利慾に恬淡な人物である。この點官僚の嵩敬を得、政黨人から黒幕と目される所以である。

彼は、今日では、押しも押されもしない官僚軍の總元締、その配下と目される乾分には、前内相後藤文夫を筆頭に、湯淺倉平、田澤義鋪、次田大次郎、吉田茂、丸山鶴吉、松村義一等々多士濟々である。

生ける屍鈴木喜三郎親分

「腕の喜三郎」と綽名された政友會總裁鈴木喜三郎も、「おらが首相」田中總裁時代には、久原房之助を擁し、鳩山一郎、故森恪を兩腕として、勢力の擴大強化をはかり、故床次竹次郎一派に拮抗して、政界隨一の大親分だつた。

悠々白適の故犬養毅をロボット總裁に盛りたて、床次の鼻をあかした手際は、どうして鮮かなものだつた。

しかし、犬養内閣の成立に際し、久原は協力内閣を主張して、鈴木と意思の疎隔を來し、次いで、中橋内相の後任問題で、完全に鈴木と袂を別つた。その後、五・一五事件以後に及んで股肱と頼む森恪、秦豊助死去し、勝田主計又、その陣營を去るに及んで、鈴木勢力は頓に衰微した。

そこへ起つたのが、政黨の無力不信任の聲である。

流石の親分、強氣ばかりでは、足搔がとれず、その上病氣に見舞はれ、本年の總選舉には落

選の憂目を見るに至つては、辛抱強い乾分達からも愛想をつかさされ、醜體極まる親分に、成り下つた。

再び貴族院議員に返り咲いたとはいへ、生ける屍同然の親分では仕方がない。

現在、彼の乾分と目される所謂鈴木系は、鳩山一郎、安藤正純、川村竹治、島田俊雄、松野鶴平、山口義一等々及び舊森系の面々、それに外援的立場にあるもの十數名を算へられる。

しかし、眞に彼が信頼し得るは、相談役の鳩山を除いては、安藤一人だと稱されるのは、餘りにも悲惨である。

中島知久平の如き金ヅルは既に、鈴木の傘下を離れてゐる。

惑星親分久原房之助

怪物久原房之助は、鈴木喜三郎とは異つた意味の政界の大親分である、

彼は日本の政界には、その比を見ない大型の人物である。

「一國一黨が日本精神だ！」

などと言つて、事務員みたいな政治家の度膽を抜くかと思へば、

「神武天皇しか尊敬に價する人物はない。」

などと、眞面目に設をなすところ、少々狂氣じみてさへゐる。

彼は元來が事業家である。

明治二年山口縣に生れ、藤田組の創業藤田傳三郎は、彼の叔父である。明治二三年慶應義塾卒業後森村組に入り、二十二歳の時藤田組に轉じて、小坂鑛山の經營にあつた。そこで七年間坑の中で、坑夫の生活から叩き上げ、後獨立して、鑛山及び製煉業を起し、先づ日立鑛山に成功し、久原鑛業會社を創立、歐洲大戰に際して多大の富を得た實業家である。

事業家としての彼は、恐しいまでに度胸があつた。

久原商事が年一千万近くの利益をあげてゐた當時、ベルシャに何百萬エーカーの土地を購入して、阿片を作つたり、近東方面へ、盛んに貿易の手を擴げたりした。

事業家としてのみ終始したならば、彼は尊敬すべき偉大な成功者であつたかもしれない。しかし彼は「長州の血」を受けた野心家であつた。先輩井上馨、山縣有朋、桂太郎等に利淑したが、そも／＼の蹉鐵の第一歩だつた。

彼は政治的野望を抱いて、友人田中義一に、莫大な政治資金を貢いで、政界へ乗り出した。政友會内に、彼のバラ撒いた資金は、前古未曾有に莫大なものだった。

それにも拘らず、乾分といふ程のものは少く、僅に津雲國利位のものである。

久原は政治家としての生涯に入つたが、本質的には依然として、商人だった。この點に彼が政治家としての道徳觀念の欠除を非難され、乾分が出来得なかつた素因がある。故森恪は、

「俺は久原と絶交した。あの人は不道徳だ！」

と、憤激したことがある。俠客的氣質をもつ森としては、當然なことと言はねばならない。資金の提供にのみ盡力して、しかも尊敬されず、乾分も少い、それが又日和見主義的な存在であるに至つては、久原も亦、氣の毒な親分と言ふべきである。

久原は二・二六事件以後、鳴りをひそめて、政界にも財界にも、顔出してゐない。彼の身邊に關しては、種々なる噂がある。しかし、その真相は渾沌として、容易に掴み得べくもない。

金で買つた親分町田忠治

民政黨には、黨風のしからしむるところか、所謂親分肌の人材に乏しい。僅に川崎卓吉位のものであつたが、彼は永井柳太郎と共に、未來の總裁を約束されながら、急逝してしまつた。

富田幸次郎は、豪放磊落な點、親分肌にも近いけれど、金力に恵れず、その點親分たるの資格がない。

矢張、強ひて求むれば、一黨を引具してゐる總裁町田忠治を親分と言はねばなるまい。

「フロントウー」だの「キンメシ」だのと冷笑されながらも、一黨の總裁に納つた彼は、異色ある人物である。

文久三年秋田縣に生れ、大學選科の出身である。役人の經驗は二年きりなく、官僚ではない。

「天下を語る者、新聞記者たらずんばあらず。」

と、朝野新聞に入つた彼は、元氣がよかつた。朝野が政府に買収されると、學堂、木堂と共に報知新聞に據つたが

「政治をやるにや金がなくちや」

と、更に轉向して日本銀行に入り、大阪支店で喧嘩をして、山口銀行の頭取になつたり、東洋經濟新報を興したり、報知新聞の社長になつたり、選挙に落選したり、苦選の結果、漸く當選したり、頗るの苦勞人である。

この點親分たるの資格は充分にある。その上大變な丸持ちとあつては、鬼に金棒である。しかし、彼は世に言ふ親分ではない。東北辯丸出で、實直で、算盤高い。

「けちである。」

と、いふ評判が、大親分の素質を防げてゐる。従つて、これぞといふ乾分もないが、矢張親分の一型である。金の切れ目が縁の切れ目となる、そうした種類の親分である。

世に叛いた親分安達謙藏とその子分

國民同盟の安達謙藏も、小なりとはいへ、一世帯を背負つて、その傘下に同志を糾合してゐる以上、サミシイながらも一廉の親分である。

明治元年、熊本縣に生れ、熊本濟々愛の出身、朝鮮時報、漢城新報社を興し、明治二八年十月閏王妃殺害事件に連座した志士肌の男である。後、佐々友房の後を承けて、熊本國權黨の重鎮となり、明治三十五年以來衆議院議員たること十餘回、大正三年大隈内閣の外務參與官、同一四年加藤内閣の逓信大臣、昭和四年濱口内閣及び同六年の若槻内閣の内務大臣、同年末、協力内閣の爆彈を投じて、内閣總辭職の因をなし、民政黨を脱黨した古強者である。

選挙界の情誼、地盤關係に精通し、「選挙の神様」と稱されるだけに、乾分も案外に多い。

しかし、中野正剛、山道襄一等の中心分子が離黨して以來、その陣營は流石に淋しい。

子飼の乾分をガツチリもつてはゐるが、その數も次第に減少の一途を辿つてゐる。これも世に叛逆した親分の悲哀であらう。

清瀬一郎、大竹貫一等は同志と言ふべくして彼の乾分ではない。

官界の巻

一八

時代と共に變る親分子分

國民の政黨への不信任が、政黨の没落現象を惹起して以來、その反撥が官吏の性質を變化せしめるに至つた。

官吏層は、縦に、官廳の性質によつて、内務、司法等の權力行使機關に屬するものと、鐵道通信保險、專賣等の企業經營に屬するものとに大別することが出来る。

「新官僚」なるものの擡頭が叫ばれ、世人注視の的となつたのは前者にして、後者は私營會社と、その仕事に於いても、觀念體系に於いても、何等異るところがない。従つて、官界を論ずる場合、常に問題になるのは、主として前者である。

政黨政治華やかなりし當時は、官界には、政友色、民政色なる系統もしくは閥もあつたが、今日では、さうした區分は存在しない。

又、司法畑には、平沼騏一郎系、鈴木喜三郎系等といふ言葉が、未だに残存し、外交畑には幣原喜重郎系等といふ名稱が使用され、現に前外務次官重光葵の如きはその一人と目されてゐる。

陰に陽にかうした個人的親分乾分關係は、依然として存在することは、疑ふ餘地がない。しかし、さうした關係は、新官僚群の前には、甚貧弱極るものと變化してしまつた。

官界に於ける親分乾分の關係は、より集團的なものに移行したと見なければならぬ。

新官僚の親分後藤文夫とその子分

所謂新官僚の地位は、官吏官僚のイニシアティブに基いて、積極的な努力によつて、獲得したものでなく、政黨の衰頹に乗じて、政黨に對立する一部勢力に結合し、それに追隨することによつて、獲得したものである。

國家的權力を背景として、舊套を脱して、不遇に壓迫されて來た潜在的な指導者意識を満足させようとする、比較的少壯官吏の野望が、その裏面に働いてゐたのである。

従つてその中心は内務省にあり、發展も目醒しかつたが、二・二六事件以後、既に没落の兆を示してゐる。

しかし、その勢力は蔑視すべからざる底力をもつてゐる。

この新官僚のリーダーとしての存在は、前内務大臣後藤文夫である。

後藤は伊澤多喜男の、自他共にゆるす、寵愛の乾分である。

後藤を親分としてその傘下に集ふ乾分は、調査局長官吉田茂、彼が内相たりし時、その下に警保局長として棘腕を謳はれた唐澤俊樹、前警視總監小栗一雄、相川勝六、田澤義輔等々、多士濟々である。

後藤は明治一七年大分縣に生れ、同四一年東京帝大法科を卒業し、長年内務畑に育つた男、官僚の親分としては、充分な資格を具備してゐる。

こゝにいふ吉田茂は、現駐英大臣にして、牧野伸顯の女婿である吉田茂とは、同性同名の異人である。

後藤と唐澤の關係は古く、唐澤が内務省を辭して、浪人してゐた時、後藤がその人物手腕を認めて、拾ひ上げた時に始まり、今日に及んでゐる。唐澤は後藤を親分と仰ぎ、彼の爲めとあらば、水火をも辭せぬ忠實な乾分である。

田澤も亦、唐澤に劣らぬ、後藤の忠實な乾分である。後藤が青年會理事長を辭して後、その地位を襲ひ、後藤の推薦で貴族院議員にまでなつた男である。

大藏省の黒田英雄親分とその子分

所謂新官僚なる新興勢力とはその意義を異にするが、大藏省に黒田閣なるものがある。

廣田内閣が成立すると同時に、藏相の重任についた馬場鐵一は、「黒田ブロック打倒」の旗幟を掲げた。

馬場は、性根激越ではなくして、圓轉滑脱な如才なさをもつてゐる。その馬場が打倒を絶叫するとは、黒田閣は恐しいまでに執拗な勢力を保持してゐたものと見て可なりであらう。

黒田英雄をリーダーと仰ぐ一派が黒田閣であること言ふまでもないが、彼は明治一二年岡山

縣に生れ、同三八年東京帝大法科卒業、大藏省に入り累進して、銀行、主税各局長となり、昭和二年田中内閣の時、次官に昇進、同四年罷め、昭和六年一二月、高橋藏相の下に、二度の次官勤めをした男である。

彼は、その履歴が示す如くに、生粹の大藏省育ちである。一生の大部分を大藏省で過した男である。

彼はその間、人事を完全に掌中に秘めて、長年に亘つて楚固な黒田ブロックを形成したのである。

彼は仲々の傑物、帝人事件さへなければ、馬場鉄一より一足先に藏相になつてゐたかもしれない。事實彼は、馬場鉄一よりも結城豊太郎よりも、利け者である。

この黒田大親分の下に忠誠を誓ふ乾分は、いづれも手腕家揃ひ、その主なるものは、前の專賣局長官中島鐵平、馬場藏相の忌諱に觸れて調査局に左遷された前の主税局長石渡莊太郎、主計局長加屋興宣、對滿事務局長となつた青木一雄、造幣局長として大阪に敬遠された人間野武雄等々、いづれ劣らぬ逸才である。

財界の巻

私的内在的な親分子分關係

近代資本主義國家に於ける財界は、封建時代と異つて、人と人との關係よりも、金と金との關係を重視する。

殊に各大財閥が、獨占資本主義強化に邁進しつゝある今日、財閥の直系、傍系、何々會社の子會社、孫會社等々、事業經營上縦の從屬關係が愈々明瞭に存在してゐることは、一目瞭然たる事實である。

従つて、さうした關係から、さうした各會社の重役間に、一種の親分乾分の關係が存在することになる。それは雇傭契約以外の色彩をもつものである。

しかし、かうした、縦に直線をもつて貫通された関係は、資本主義機構が、必然的に生む公的関係で、個人の意思によつて決定されるものではない。
こゝに決らうとする親分乾分の関係は、さうした種類のものでなくして、更に内在的な、更に私的な関係である。

同郷関係とか、同學関係とか、姻戚関係とか、その他それに類する関係に胚胎して、個人的関係に於いて結ばれる関係である。

今日は、明治資本主義前期に於けるが如くに、英雄的資本家の誕生を許さない時代である。各財閥は、統制強化と産業合理化の結果、必然的にさうした存在を、拒否するのであるが、それにも拘らず、財界人間に、大親分的存在は少からずある。

郷誠之助、池田成彬、藤原銀次郎、根津嘉一郎等は、さうした代表的なものである。

かうした財界の巨頭達は、或は自ら親分意識を所有しないかもしれない、しかし彼等の取り捲き連は、明確な子分意識をもつてゐる。

「高等世話人」郷誠之助とその一黨

財界に於ける親分乾分の関係で、知られてゐるのは郷誠之助とその一黨である。帝人事件を契機として曝露された彼等即ち番町會の悪行は餘りにも有名である。

番町會は、今は存在してゐないけれども、その成立は遠く大正十二年に遡ることが出来る。

當時會員は十名、後野田俊作が、政界入りのため脱退したのであるが、新加入もあつて、開散直前は左の十一名だつた。

河合良成 會議所議員、福德生命専務

永野護 會議所議員、帝國人絹取締

正力松太郎 讀賣新聞社長

春田茂躬 大東京鐵道専務

岩倉具光 合同運送専務

伊藤忠兵衛

伊藤忠商事社長

澁澤 正雄

昭和鋼管社長

後藤 國彦

成田鐵道副社長

金子喜代太

會議所議員、淺野セメント專務

中野金次郎

會議所副會頭、國際通信社長

松岡 潤吉

松岡汽船社長

正力を除く外は、各々、少くとも十會社位の重役を兼ねてゐる財界人のみである。世間の非難がやうやくうるさくなつた頃、會の幹事後藤國彦が、聲明書を公開して、會の立場を明瞭にした。

その聲明書によれば、番町會とは、郷誠之助の人格に傾倒して、期せずして集つた商業家の一團で、彼を中心とする、單なる社交的、もしくは修養的の會合に過ぎない、といふのである。しかるに、郷誠之助とは如何なる男か？

彼は慶應元年東京府に生れ、明治四三年襲爵、夙に實業界に入り、多年東京株式取引所理事

長の職にあつたが大正一三年辭職、東京電燈取締役、東京商工會議所會頭等の經歷をもつ男である。ドイツへ留學したこともあり、明治四四年以來貴族院議員でもあつた。

實業界の先輩で「高等世話人」と綽名されてゐた財界の巨頭である。

郷の上二番町の邸宅へ、會員達が集合しては郷親分と利權漁りをしたのである。

郷と會員の關係は恰も鎮守の神様と氏子の如きものであつた。

後藤國彦の言によれば、郷は人格者であり、番町會の目的は社交的、修養的であるといふのである。

しかし仕事師肌の福澤桃介は言つてゐる。

「郷といふ男は、好色以外に、何一つ取り柄がなく、何一つ仕出來したことがない。」

ヒンデンブルグまがひの物凄い顔面表情はしてゐるが、至つてボンクラで、修養とは何を意味するのやら、と嘲弄したい程である。しかしかうした欠點、甘さの故に、彼は押しも押されもせぬ財界の大親分である。

番町會は遂に開散されたが、當時の會員は、依然として郷の乾分であり、郷と共に横暴の限りを盡してゐる。

現在では、河合は日華生命へ轉じ、永野は雜業屋である。澁澤は澁澤榮一の三男で、野田は野田大塊の二男で、現に司法政務次官である。後藤は京成電車へうつつてゐる。郷の乾分は、その他に、夥しい數に上る。近世日本財界の利け者森蘆昶は、彼の新進乾分である。郷の財界に於ける顔役的存在は、今なほ素晴らしいものと言はねばならない。

引退しても大親分池田成彬

昭和十一年四月三〇日、三井財閥の總番頭池田成彬は、正式に引退した。彼は慶應三年、山形縣に生れ、明治二年の慶應義塾出身、米國に留學し、歸朝後三井銀行に入り、爾來約四十年、七十歳の今日まで、三井財閥のため、忠實な社員として終始した財界の巨頭である。元來、三井は爲替兩替店による貸付資本が、近代的銀行組織に發展した金融資本財閥である。その大番頭が池田であつた。

池田はその金融資本閥制覇の過程に於いて、電力、或は瓦斯方面に、幾多の乾分を持つに至つた。

東邦電力の松永安衛門、日本電力の池尾芳藏、東電の小林一三、大同電力の増田次郎、最近、惜くも倒れた東京瓦斯の岡本櫻等はその代表的なものである。

いづれも日本財界の利け者ばかりである。

この大親分池田は「野人になつて閑地につきたい。」と大磯の農園に引退して、殆んど上京しない。しかし、小にしては三井財閥、大にしては日本資本主義は、彼を閑他につかせようとはしない。

三菱の大番頭申田萬藏は言つてゐる。

「南條君にしても、金子君にしても、或は島田君にしても、大三井を統轄して行く貫録が足りないね。だから結局、池田君がかけになつて、實質的に統轄するより手段があるまいね。」申田の觀察は正しい。

三井合名の筆頭常務南條金雄や、彼の介添役の常務理事金子堅次郎は、今もつて、週一、二度は、自動車を飛ばして、大磯の農園に池田を訪ね、最高政策の祕策をさづかつてゐる。

池田の財界よりの引退は、單に表面上のことに過ぎない。彼は依然として三井財閥の最高指導者であり、日本資本主義の英雄的擁護者である。

従つて、乾分達も亦、池田に對する親分の關係を解消しようとはしない。

無宗教者である反面、強い信念をもつ池田は、眼の黒いうちは、郷誠之助と共に、日本資本主義の最高峰であり、共に大親分である。

近代型親分藤原銀次郎とその子分

近時、頗りにインテリ型の近代的親分として賣り出した男に王子製紙の藤原銀次郎がある。彼は嘗つては、池田成彬の乾分と目されてゐたが、今日では一人前の親分である。

彼は明治二年、長野縣に生れ同、二四年慶應義塾卒業、一時松江日報記者を勤めた後、三井銀行に入り、後三井物産に轉じ、臺北支店長となり、更に三井を代表して王子製紙専務から社長になつた男である。

退職積立金制度の法制化では、池田を相手に大論戰を演じて男をあげ、いよく親分の資格

を獲得した才子である。

最近では、關東全産聯の指導的地位をすて、今後は専ら中小商工業者の金融機關の整備に専念すると稱してゐる。

彼の乾分としては、王子製紙の高島菊次郎、全産聯常務の膳桂之助等、利發な人材がある。今後に於ける親分藤原の活躍は、刮目すべきものであらう。

その他の大親分と子分

その他に、財界の親分としては、根津嘉一郎を看過することは許されない。

彼は萬延元年、山梨縣に生れ、夙に實業界の成功者となり、明治三十七年以來衆議院議員に選出されること四回、鐵道王、甲州財閥の大御所として、知られてゐる。

彼は大正一〇年には、私財三百五十萬圓を投じて、武藏高校を創立し、書畫骨董を愛玩し、茶道に精進してゐると稱せられる。

藤原銀次郎が、近代的色彩濃厚なインテリ型親分であるのとは反對に、彼は仁義型の舊時代

の所産たるを思はせる大親分である。

東京電燈の河西豊太郎、富國徴兵の吉田義輝、日清紡績の宮島清次郎等は、彼の錚々たる乾分である。

文壇の巻

「文藝春秋社」に據る菊池寛とその一派

文壇程、親分乾分の關係が明瞭な社會は少い。親分と稱される巨匠中、斷然光つてもゐ、強力な勢力を伸張してゐるのは、「文藝春秋社」を背景にもつ菊池寛である。

彼は明治三二年、香川縣高松市に生れ、同四一年高松中學卒業後上京して、東京高等師範學校に學んだが、一年餘にして除籍、同四三年一高に入學、大正二年故あつて退學同年九月京都

帝大英文科選科に入り、翌年本科に轉じて、同五年同科卒業、同年一〇月時事新報社記者、大正八年退社して、阪大毎日新聞社員となつた、ジャーナリスト出身である。

大正七年「中央公論」に出世作「無名作家の日記」を發表して以來、小説家として認められ、大正一二年一月、莫然と彼の周圍に集る文學青年、横光利一、片岡鐵兵、川端康成、中河與一、佐々木茂索、今東光、小島政二郎、佐々木味津三、酒井真人等を配下として、同人雜誌「文藝春秋」を創刊した。

親分としての菊池は、こゝにスタートを切つた。

以後、彼は同誌によつて、文壇人の積極的團體行動の足場をつくり、文筆業者の社會的地位の向上をはかつた。

「文藝春秋」が權威ある機關紙に發展するに従ひ、彼は「オール讀物」「話」等を創刊し、いよく大親分として、搖ぎなき存在となつた。

「文藝春秋」の發展に偉大なる貢獻をなし、文人フアツシヨ運動の先鞭をなした、大衆小説家直木三十五は、不幸病死したが、横光、川端、片岡の三人は、菊池の乾分中での出世頭として日本文壇に重をなしてゐる。

ことに横光は、文學青年から「文學の神様」と呼ばれ、彼の評論は、彼等にとつては、批判を超越した指導原理とまで看做されてゐる。

比較的新人乾分の川口松太郎も、最近ではメキ／＼賣出し、才人、小説家として、將來を矚目されてゐる。

「文藝春秋社」を經營し、金力、權力、文才、更に度胸のある菊池は、如何なる點よりするも、文壇隨一の大親分たるを失はない。

「新潮社」による中村武羅夫とその子分

菊池寛程派手ではないが、「新潮社」を背景にもつ中村武羅夫も、文壇での大親分である。最近では引續く赤字に悩みながらも、體面上廢刊もならず頭痛の種となつてゐる「新潮」も、數年前は、文壇に於ける一權威たるの資格があつた。

その頃、かうした文藝雜誌を背景に、中村は隨分と種々數多な乾分を集めた。皆當時の文學青年であつたが、その中で、現に社會的に認められ、文壇活動を續けてゐるものに、尾崎士郎

淺原六朗、岡田三郎、戸川貞雄等がある。

しかし、彼等も、横光、川端、片岡等を筆頭に群棲する菊池の乾分達に比較すれば、その陣營は淋しう。

中村は明治一九年、北海道に生れ、上京して「新潮」記者となり、爾來二十有餘年間、同社勤務の傍、通俗長篇小説の製作に従事してゐるが、近時、その人氣は次第に薄らぎ、作家としても、親分としても、遂に菊池に及ばない。

三田の親分水瀧太郎とその子分

三田學閥を背景にもつ水上瀧太郎は、小説家としても、親分としても、特異な存在である。

彼は明治二〇年、東京市麻布に生れ、慶應義塾卒業後、明治生命保險會社員となり、現に同社重役である。

さうした多忙な社會的地位にありながら、現に製作をつゞけ、文壇一方の旗頭として恥しからざる創作を發表してゐる。

彼は文壇人としては、我が國にその比を見ない變種である。

三田の文科出身の文學志望者は、多少の差違こそあれ、何等かの意味で、皆彼の世話を蒙つてゐる。彼は三田派文壇人の總帥として、押しも押されぬ親分的存在である。

彼の乾分にして、文壇に認められ、現に活躍しつゝある者に、久野豊彦、石坂洋次郎、木村庄三郎等がある。

その他の群小親分

この他、明治大學文科で、盛に文學青年を製造しつゝある山本有三も亦、文壇一方の親分である。

彼は明治二〇年、栃木縣に生れ、正則英語學校を経て、大正四年東京帝大獨文科卒業の劇作家である。

人情主義的作家として有名であり、演劇畑に乾分多く、その方面に傑出してゐる。

劇作家として、又翻譯家として、人氣作家である岸田國士は、彼の第一の乾分である。

久米正雄も亦、菊池寛の地盤にあつて、一廉の親分である。自ら「良くもない、悪くもない、何處が良いのかはつきり判らない作品をものするので、ブルジョア作家ぢや。」と、怪し氣な評論を振りかざしながら、菊池と喧嘩もせず、利用すべきところは巧に利用して、自己勢力の擴大強化をはかつて行くところ、仲々抜け目のない利巧者である。

彼は明治二四年、長野縣上田市に生れ、一高を経て、大正五年東京帝大英文科を卒業し、大正七年より作家生活に入り、傍、新聞社、放送局等とも關係をもつてゐる男である。

別に、直系乾分で、有名なものはないが、それにも拘らず、文壇一方の親分である。

廣津和郎とか、佐藤春夫とか、徳田秋聲、前田河廣一郎、貴司山治、長谷川伸、吉川英治等も、それぞれ文壇一方の親分である。

その他にも特種な親分作家は相當にある。

探偵畑の親分森下雨村とその子分

大衆物中探偵小説の領域では、森下雨村は、斷然大親分である。

彼は長年「新青年」の編輯長だつた關係から、日本文壇に於ける探偵小説開拓の功勞者である。

彼は自ら探偵小説を翻譯もし、製作する。

しかし、彼の探偵小説は、上手とも言へないし、又面白くもない。嘗つて、「白骨の處女」を當時全く無名の文學青年北川冷二に代作させて、問題等おこした、實力に乏しい作家である。

探偵作家として評價するならば、彼は恐らくは二流以下であるが、曾ての「新青年」といふ背景が物を言つて、貧弱極る實力にもかゝらず、依然として、この方面の大親分である。

現代文壇に活躍しつゝある探偵小説家の殆んど總べてが、彼の世話になつた乾分である。

日本隨一の探偵小説家江戸川亂歩を初め、横溝正史、延原謙、水谷準等、皆彼の乾分である。惜しくも斃れた谷讓二こと牧逸馬も亦、彼の乾分だつた。

畫壇の卷

舊態依然親分割據の畫壇

一度口を開けば、長髪を靡かせて、十年一日の如く、同じ言説をなすが、我が日本の畫家である。

「美術の自律性」を論じ、「藝術至上主義」を強調するが、彼等は自己が住む社會機構の何たるかも、認識し得ない先生方が多い。

畫家は、大先生から美術學生の末に至るまで、智識水準が低い、と言はれてゐる。酒や女にかけては、相當の猛者揃ひであるが、好學心をもつて、文化雜誌を通讀する者は、極めて少數である。正に彼等は時代離れのした人種であること、その服装によつて窺知し得られる如くで

ある。

従つて、彼等は如何なる文化人よりも、より封建的な社會に住んでゐる。それは、組織に於いてもイデオロギーに於いても、言ひ得ることである。

この意味に於いて彼等は、日本畫家にせよ西洋畫家にせよ、徳川時代そのまゝの師弟關係の延長に過ぎない社會に住んでゐる。それは即ち親分乾分の社會である。

畫壇程、親分乾分の關係の明瞭なところも少い。恰も戰國時代に於ける群雄割據の如き状態が、我が國畫壇の現状である。

昨年以來、數回に亘つて惹起された、例の帝展騒動も、文部當局のファツシヨ的統制強要よりも、寧ろ畫壇に於ける親分達の勢力争ひに、その素因を求める方が適切であらう。

西の親分竹内栖鳳とその一黨

京都派の親分としては、竹内栖鳳、菊池契月、川村曼舟等、多數の弟子を、恰も商店の番頭徒弟の如くに引具して、天晴大親分に納つてゐる。中にも竹内はその最たるものである。

栖鳳は元治元年、京都に生れ、土田英林、幸野樸嶺に師事し、文展第一回よりの審査員、後帝室技藝員に命ぜられ、京都派日本畫壇の元老である。

有名な弟子の多いことに於いても、彼は御所たるを失はず、その主なるものは、西村五雲、西山翠嶂、最近死去した土田麥僊等にして、堂本印象、福田平八郎、中村大三郎等々も、彼の弟子に當つてゐる。

彼には、弟子の面倒を見るだけの金力があり、しかもその社會的地位は、弟子の作品に、入選若くは推薦によつて、商品價値を附與するに充分である。

權威ある展覽會に入選を豫約し、特選を保證することに於いて、彼は極めて強力な勢力家である。それ故に、彼は極めて有爲な大親分であるのである。

東の親分横山大觀とその一黨

日本畫壇に於いて、竹内栖鳳と共に大親分の權勢をほしいまゝにしてゐるのは、日本美術院の創立者横山大觀である。

彼は明治六年、水戸に生れ、名は秀鷹、少年時代東京英語學校に學んだが、後轉向して東京美術學校日本畫科に入り、同校第一回の卒業生である。早くから岡倉覺三に親炙してその啓發を受け、美術學校の教授となつたが、岡倉と共に職を辭し、日本美術院を創立した經歷をもつてゐる。

岡倉没後、美術院の巨頭として、今日に及んでゐる。

その弟子の逸才には、小林古徑、前田青邨、安田靉彦の三羽鳥があり、木村武山、山村耕花、奥村土牛、中村岳陵等、又彼の愛弟子即ち乾分である。

西の大親分を竹内栖鳳とすれば、東の大親分は横山大觀である。詢によき好一對と言ふべきである。

下村觀山亡き今日、大觀の大親分としての聲望は、素晴し。

群小團體の總帥とその一黨

舊帝展系の、東京に於ける荒木十畝、小室翠雲、川合玉堂、松岡映丘、鏑木清方、京都に於

げる菊池契月、川村曼舟も亦、前二者に比較すればその規模は遙かに小さいが、充分な責任をもつ立派な親分である。

十畝は、池上秀畝、西澤笛畝等を中心とする讀畫會の總帥である。

翠雲は、矢野橋村、水田竹圃等の日本南畫院の總帥である。

玉堂は、兒玉希望を筆頭とする若手畫家集團の指導者である。

映丘は、吉村忠夫、服部有恒、高木保之助等を幹部とする國畫院の總帥である。

彼は「民族精神の精華たる古典の素養に基いた新民族總畫建立」といふフアツシヨ的スローガンを掲げて、平沼祺一郎、荒木、末次等を顧問に頂いて、藝術家良心に、自ら泥を塗つてゐる。しかし、時勢に投ぜんため、かゝる手品をなすところ、彼も亦、山師的親分と言ふべきである。

清方は、伊東深水、山川秀峰を中心とする郷土會の首領である。

契月は菊池塾、曼舟は早苗會の總帥である。

その他、川端龍子も亦、青龍社なる團體を卒ゐて、一廉の親分に納つてゐる。

x

日本畫壇は昔ながらに、親分輩出の形であるが、西洋畫壇には、親分乾分の關係は、それ程明瞭ではない。

西洋畫が我が國に傳來習得されたのは、古く天正時代と言はれてゐるが、それが持つ自由主義的傾向のしからしむるところか、畫家の素質の相違に基因するためか、不思議な程、親分乾分の、かうした意味での關係はない。

樂壇の卷

日本樂壇の元老山田耕筰とその子分

樂壇は種々なる意味に於いて、現代社會機構に於ける、變態的存在である、といふことが出来る。

元來、我が國に於いては、音樂家の發生理由が、教育音樂家であつたといふ事實を、樂壇を論ずる場合無視することは出来ない。

淳風美俗のために教育課目の中へ音樂を入れ、それを擔當する教育者を養成するために、東京音樂學校を、文部省は設立したのである。

決して、興業的音樂家を養成しようとは、文部省はしなかつた。

かうした情勢から變態的に成長して來た我が日本の樂壇は、未だ若く、親分、乾分のそれ程に複雑した關係はない。

先づ樂壇第一の大親分は山田耕筰であらう。

彼は明治一九年、東京市本郷區生れ、少年時代苦學したが、十五歳の時、岡山にゐた義兄ガントレットの家に寄寓し、同地の中學に入學、義兄よりオルガンを習つた。

明治二四年關西學院に入學、合唱曲を作曲して、音樂學校へ入校しようと志すに至つた。

明治三六年渡米したが、翌年母の死に遭つて歸朝し、音樂學校聲學科に入學し、同四一年卒業して、研究科に止り、同四三年岩崎小彌太の後援でドイツに留學した。

ドイツではベルリン高等音樂院で作曲を學び大正三年歸朝して、作曲家としての生活に入つ

た。

大正四年五月、日本最初のシンフォニー・オーケストラ團であるフィルハーモニー管絃樂部を組織し、小山内薫と自由劇場、新劇場、土曜劇場を興した。

以後、今日に至るまで、實に於いても、量に於いても、日本第一の作曲をなし、音楽界に甚大な貢獻をした。

そして、その間に、自然に、自他共にゆるす樂壇のボスとなつてしまつた。

既製音楽家で、彼の指導を受け、世話になつてゐるものは頗る多い。

彼はコロムビア蓄音器にも關係し、財力、金力を持ち、年齢からしても、業績からしても、樂壇第一の大親分である。

石井漢に舞踊詩創作を暗示したのも、彼である。

貴族出の親分とその乾分

新響改組問題からオーケストラを離れてゐる近衛秀麿も亦、樂壇での親分である。

彼は明治三十一年、東京に生れ、學習院から東京帝大文學部に學んだ、秀才である。

少年時代より音楽を好み、洋琴提琴を學び、作曲理論を山田耕筰に學び、大正一〇年ドイツに留學して、ベルリン・フィルハーモニーを指揮して歸朝した。

その後、山田耕筰を助けて交響樂團設立に盡力し、大正一四年日露交響演奏會を機に設立された日本交響樂協會の指揮者に就任したが、翌年山田耕筰と別れて、新交響樂團を創立し、兩來回を重ねること百餘回、東洋一の交響樂團となした手腕家である。

昭和五年再び渡歐、ロシアで數回指揮を試みて翌年歸朝した。

彼の著書としては、「シエーネベルク日記」「作曲」「御大典交響曲歌曲」等がある。

彼は貴族院議長で、將來總理大臣の有力候補者である五攝家の筆頭、近衛文麿公の令弟である。

彼は金權をもつお坊ちゃん氣質で、しかも政治的手腕も相當には認められてゐる。山田耕筰が二年未滿で放棄した程經營困難な管絃樂團を十年間も、大した問題も惹起しずに維持した手腕は、買つてやらねばならない。

山田耕筰がアイデアリストの親分肌であるに對して、彼は實務肌の親分である。

現在では、淋しさうに、オーケストラから離れてはゐるが、今の樂壇に於ける親分的立場は解消されてはゐない。

掛聲ばかりの大御所伊庭孝

伊庭孝も亦、この方面での一廉の親分である。萬事、大仰に表現することを好むチャーナリストに言はせれば、彼は樂壇の大御所である。

彼は作曲家でも指揮者でもなく、音樂評論家である。

彼は明治二〇年、東京に生れ、京都同志社神學部に勉學しつゝ傍ら音樂を研究した變種である。

一時高島素之等と社會運動に投じたこともあつたが、間もなく轉向して上山草人等と舞臺劇協會を創立した。彼は又、大正五年高木徳子と共にオペラ團を組織して淺草により、所謂淺草オペラ全盛時代を齎した功勞者である。

彼は大正八年以後は、専ら評論家として、著作に従事し、音樂雜誌「ピアノシモ」を發行し

たりした。「音樂評論」も彼が創刊である。

昭和三年放送曲目編成委員、昭和六年日本大學藝術科講師に就任した。

著書としては、「自眉音樂叢書」三十巻を初め「聲樂教本」「日本音樂概論」「シニーマン傳」等多數ある。

彼の我が國樂壇の發展に對する貢獻は大きい。しかし、彼には大御所としての資格に缺くところあるらしく、人氣がない。

K・O・Kの所長になつたり、音樂協會の理事長になつたりして、威張り返へつてゐるが、獨りよがりの親分で、乾分らしい乾分がない。肩書から打算的に乾分となる日和見主義的乾分は無數にあるが、個人としての彼を親分に仰がうとする者はない。

藤原義江も、元をたゞせば、彼の乾分である。しかし、彼は伊庭に餘り好意を示して居ないと言はれてゐる。

音楽協會のボス堀内敬三

「音楽協會のボス」と綽名される堀内敬三も亦、一種の親分である。

彼は音楽評論家であり、作曲家であり、又作詞家である。

彼は明治三〇年、東京市に生れ、東京高師附屬中學校在學中に、大田黒元雄の影響をうけて、音楽を研究し、「音楽と文學」同人として、邦譯歌詞及び評論を發表した天才兒である。

大正六年渡米しミシガン大學で工學を學ぶ傍ら、同市音楽學校選科で作曲學を學び、更にマサチューセッツ工科大学を卒業し、マスター・オブ・サイエンスの稱號を獲得して歸朝したが、彼が選んだ職業は、工學には縁の薄い東洋音楽學校講師、東京中央放送局囑託、武藏野音楽學校講師、日本大學講師等であつた。

彼の代表作品には、邦譯歌詞「君よ知るや南の國」等約二百曲、作曲には「慶應援歌」「黒い瞳よ今いづこ」等約六、七十曲、等、傑作が多い。

著書としては歌劇「カルメン」全譯「ワグネル」と其の音楽」「明治大正昭和流行歌曲集」

等がある。

彼も亦、ノホホンのお坊ちゃん氣質である。かうした性格は、親分たるの一資格とも言へるかもしれない。

とにかく、彼には相當良い乾分がある。

しかし、何んと言つても、樂壇に於ける大親分は山田耕筰の獨占到近いものであるから、彼の親分としての存在は業績、天分より推定される程偉大なものではない。

パトロン親分大倉喜七郎

最後に、少に特異性をもつ親分大倉喜七郎男を擧げねばならない。

彼はK・O・K・即ち大倉喜七郎男樂器研究所の出資者である。

彼は明治一五年新潟縣に生れ、先代男爵喜八郎の男である。米國に留學したこともあり、大正一三年以來先代の事業一切を繼承して、大倉財閥の總攬者である。

彼はさうした社會的地位に相應しからず、世に稀にみる才子肌であつた。

スポーツも、文學も、將棋も、且那藝以上である。自ら作詩、作曲もし、演奏までやつて、素晴しい妙技を示す男爵である。

金力に恵まれ、音楽に理解のある彼は、樂壇の大パトロンとなつてゐる。パトロンとは一種の親分に過ぎないものである。

伊庭孝は彼の乾分である。その他彼の世話を蒙つてゐる樂壇人は頗る多いと言はれてゐる。藤原義江、福田蘭童も、彼をパトロンとして、少からざる恩恵に浴してゐる。かういふパトロンが、眞實の意味での「親分」であるのかもしれない。

—終—

御注文は

代金引替は御容を
切手代用は二割増

願ひます

五島富士夫著	二・二六事件の記録	定價十錢 (送料二錢)
海南隱士著	組閣難の真相 廣田内閣はどうなる	定價十錢 (送料二錢)
秋月正雄著	千波萬瀾の生涯・人間高橋是清	定價十錢 (送料二錢)
齋藤一耶著	遺囑した齋藤實とはどんな人か	定價十錢 (送料二錢)
頭山滿翁述	重大國事の秘密を語る	定價十錢 (送料二錢)
村田和雄著	歐洲の風雲・世界大戦は起るか	定價十錢 (送料二錢)
五島富士夫著	國際珍聞奇聞集	定價十錢 (送料二錢)
滿蒙事報社編	謎の秘境・蒙古の全貌	定價十錢 (送料二錢)
秋本孝雄著	若返り法とホルモン	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉著	實話讀物・職業人純情集	定價十錢 (送料二錢)
新波雪夫著	國際情緒・ハルビン物語	定價十錢 (送料二錢)
片山哲平著	映畫スタア千夜一夜	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉著	戰術奥の奥・外交は是て行け	定價十錢 (送料二錢)
加藤弘一著	空の爆彈・護れ祖國日本	定價十錢 (送料二錢)
奈緒順著	時代の爆彈・護れ祖國日本	定價十錢 (送料二錢)
須山滿洲男著	世間の裏をのぞく 風雲を孕む外蒙古	定價十錢 (送料二錢)

發行所 東京芝區三田四町二六番 東亞書房

今評判の東亞書房の十錢文庫

海南隱士著	覺悟せよ！次の大戦争	定價十錢 (送料二錢)
藤原達策著	支那は動く	定價十錢 (送料二錢)
國際研究會著	日本の財政・何年戦争に堪えられるか	定價十錢 (送料二錢)
沼上良太郎著	必ずあたる新商賣往來	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉著	一讀鬼氣！妖奇怪談集	定價十錢 (送料二錢)
白木屋專務 山田忍三述	立身出世虎の巻	定價十錢 (送料二錢)
太田義孝著	財閥功罪史	定價十錢 (送料二錢)
奈緒順著	世界珍奇怪奇見世物	定價十錢 (送料二錢)
黒田正隆著	極東の今日戦争か平和か	定價十錢 (送料二錢)
海南隱士著	明日の世界	定價十錢 (送料二錢)
岡山啓之助著	戦線に躍る日英米の勝敗	定價十錢 (送料二錢)
城南山人著	東日と讀賣の暗闘	定價十錢 (送料二錢)
東亞書房編	二・二六事件真相の真相	定價十錢 (送料二錢)
川上康吉著	誰にも出来る貯金法五十種	定價十錢 (送料二錢)
内藤伸二著	財づる物語り	定價十錢 (送料二錢)

發行所 東京芝区三田四町二番六 東亞書房 東京芝区三田四町二番六

讀書界の人も東亞書房の十錢本

野村繁著	横から見た華族生活	定價十錢 (送料二錢)
森本澄夫著	社會常識讀本	定價十錢 (送料二錢)
大澤光幾著	西園寺公望	定價十錢 (送料二錢)
秋月正雄著	列國は日本をどう見る	定價十錢 (送料二錢)
田淵茂著	靈界物語り	定價十錢 (送料二錢)
南城政夫著	税金から見た長者番附	定價十錢 (送料二錢)
高倉晁著	斷乎戦ふべし	定價十錢 (送料二錢)
城北隱士著	昭和快傑傳	定價十錢 (送料二錢)
奈緒順著	世界の謎	定價十錢 (送料二錢)
森村辰雄著	無産黨は何處迄伸びるか	定價十錢 (送料二錢)
小谷乘仙著	現代佛教は何處へゆく	定價十錢 (送料二錢)
太田義孝著	郷誠之助の正體	定價十錢 (送料二錢)
藤原達策著	現代親分乾分物語	定價十錢 (送料二錢)
時田英雄著	宇宙及生物その起源と終滅	定價十錢 (送料二錢)

發行所 東京芝区三田四町二番六 東亞書房 東京芝区三田四町二番六

早おく求め 全書店で販賣して居るす 切實の隙は直接本房へ御注文

吉岡義一郎著	非常時日本の外交陣	定價十錢 (送料二錢)
高倉晃著	逆巻く太平洋	定價十錢 (送料二錢)
小牧琢磨著	財界巨星出世譚	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉著	怪奇犯罪實話集	定價十錢 (送料二錢)
東亞書房編輯	見よ! 此躍進日本の姿	定價十錢 (送料二錢)
東亞書房編輯	常識讀本・人生百課事典	定價十錢 (送料二錢)
山門王吉著	明朗爆笑大會	定價十錢 (送料二錢)
牧山九著	女スパイの暗躍	定價十錢 (送料二錢)
秋月正雄著	要領百パーセント戦法	定價十錢 (送料二錢)
中村武耶著	東西偉人逸話集	定價十錢 (送料二錢)
東亞書房編輯	皇國軍人に慇懃	定價十錢 (送料二錢)
陸軍中將 堀内文次郎閣下述	大西郷を語る	定價十錢 (送料二錢)
箱館小史著	百年後の人種戦争	定價十錢 (送料二錢)
奈緒順著	政界財界膝栗毛	定價十錢 (送料二錢)
黒田正隆著	世界の景氣は何時爆發するか	定價十錢 (送料二錢)

發行所 東京芝区三田四國町二六 東亞書房 電話〇八三八八

滿蒙事報社編 定價五十錢 (送料五錢)
滿洲 官費 學校案内

滿蒙事報社編 定價二十錢 (送料三錢)
 小資本で 滿洲の職業 百五十種調べ
 出來る

滿蒙事報社編 定價二十錢 (送料二錢)
 人を求むる新大陸は招く
滿洲の就職手引き

滿蒙事報社編 定價二十錢 (送料二錢)
蒙古の全貌
 謎の内蒙古
 秘境外蒙古

親分乾分物語り

昭和十一年八月十六日印刷
 昭和十一年八月十八日發行

著者 藤原達策

發行者 角田恒

印刷所 東京市芝區山吹町二ノ五八 東亞書房印刷部

東京市芝區三田四國町二六

發行所 **東亞書房**

電話 東京八八三八〇番
 電話 三田三九八九番

鐵道各驛ホームスタンド一手販賣
 鐵道保養會



發行所

Printed in Japan



行發 房書亞東 京東